

# 「ゲノムハザード ある天才科学者の5日間」

★★★★

2013（平成25）年11月20日鑑賞 < GAGA 試写室 >

監督／脚本：キム・ソンス  
 原作：司城志朗『ゲノムハザード』（小学館）西島秀俊  
 石神武人（デザイン会社のイラストレーター）  
 オ・ジヌ（遺伝子研究の天才科学者）  
 カン・ジウォン（正体不明の女性記者）／キム・ヒョジン  
 美由紀（石神の妻）／真木よう子  
 伊吹克彦（石神の親友）／浜田学  
 ハン・ユリ（オ・ジヌの妻）／中村ゆり  
 警察を騙る男／パク・トンハ  
 佐藤英輔博士（杉沢製薬ゲノム研究所所長）／伊武雅刀

2013年・韓国、日本映画・120分

配給／アスミック・エース

## <「記憶の中へ」タイプは難解！>

『シネマルーム31』では私は、ダニー・ボイル監督の『トランス』（13年）について、『インセプション』（10年）（『シネマルーム25』未掲載）、『悪夢探偵』（06年）（『シネマルーム13』392頁参照）、『悪夢探偵2』（08年）（『シネマルーム22』未掲載）と同じ「記憶の中へ」というテーマの映画だが、「この手の映画の欠点（？）は、わかりにくいことだ」と指摘した（『シネマルーム31』223頁参照）。しかして、司城志朗の原作『ゲノムハザード』を映画化した本作は、「記憶の上書き」がテーマ。デザイン会社のイラストレーターである石神武人（西島秀俊）の記憶を、遺伝子研究の天才科学者オ・ジヌ（西島秀俊）の記憶の上に「上書き」してしまったことから生まれてくるややこしい物語だ。

今日が35歳の誕生日だという石神に妻・美由紀（真木よう子）がいたのは当然だし、オ・ジヌにも妻ハン・ユリ（中村ゆり）がいたのは当然。すると、石神の記憶がジヌの記憶に「上書き」されたら話がややこしくなるのは当然だ。つまり、本人はいつの間にか韓国人のオ・ジヌから日本人の石神になりきっているのに、ジヌの妻が自分の夫ジヌを返してくれと言いに行ったら、石神の妻・美由紀との間でモメ事になるのは必然だ。また、そもそも記憶だけがジヌの記憶の上に上書きされたという石神の肉体はどこに・・・？

こんな映画については、ネタバレの評論を書くのは厳禁だからこれ以上は書けないが、とにかくわかりにくいから、本作の鑑賞はそのつもりで・・・。

## <「演技派」西島秀俊ならではの熱演をタップリと！>

NHK大河ドラマ『八重の桜』では、途中で死んでしまったのかと思われながら、八重を演じる綾瀬はるかと共に最初から現在まで八重の兄・山本覚馬役で存在感を見せていた西島秀俊が、本作でも冒頭から「演技派」ならではの熱演ぶりを見せてくれる。そりゃ、目の前で妻が死んでいるのに、その同じ妻から電話が掛かってきたら頭が混乱するのは当然。さらに、そこに警察と称する男（パク・トンハ）らが入ってきて混乱する中で、妻の死体がなくなっていたり、警察と称する男たちから拉致されようとしていることがわかれば、善良な一般市民としては、そりゃもう何が何だかわからなくなるのは当然だ。男たちの手を逃れた石神が、たまたま車でそこを通りかかった韓国人の女性記者カン・ジウォン（キム・ヒョジン）の助けを借りて、妻の生死を確かめようとするストーリーの端緒はちょっと出来すぎの感があるが、この二人の掛け合い（？）の中で見せる石神の苦悩は演技派・西島秀俊の演技ならではのものが多い。石神のバカみたいな話にカン・ジウォンが付き合ったのは、心のどこかに「この話は記事に出来るのでは？」というスケベ根性（？）があったようだが、それでも一緒にラブホテルに泊まったの協力ぶりは立派なものだ。

記憶が混乱し、一人苦悩する石神を演ずる西島秀俊の熱演ぶりが本作冒頭の見どころだが、カン・ジウォンとの「協力体制」になってからも、その熱演ぶりは続く。石神がいつの間にかところどころで韓国語をしゃべり始めるのは少しずつジヌの記憶が戻ってきているせいらしい。しかして、カン・ジウォンとの会話の中で突然流暢な韓国語をべらべらしゃべり始め、自分でもそれに驚くシーンを見ていると、西島秀俊の芸達者ぶりに驚かされる。カン・ジウォンを演じたキム・ヒョジンの方も本作の撮影のために急遽日本語を勉強したらしいが、ここで大量の日本語を早口でまくし立てるのは大変だったらしい。したがって、ここではそんな日韓二人の俳優に拍手！

## <真木よう子の登場はいつ？中村ゆりとの役割分担は？>

私は、2010年のNHK大河ドラマ『龍馬伝』でお龍役を演じた真木よう子に注目したが、彼女はその後『さよなら溪谷』（13年）、『そして父になる』（13年）等に立て続けに出演し、今や日本を代表する「旬の女優」になっている。本作はそんな真木よう子の名前がクレジットされていたから、私は彼女がいつ、どこで登場してくるのかなと注目していると、アレレ・・・？私は彼女の役はきっと石神の妻・美由紀役だと思っていたが、殺されている彼の妻・美由紀の姿をみると、それはハン・ユリ役としてクレジットされている中村ゆりだったから、アレレ・・・？しかして、真木よう子が登場してくるのは、冒頭のちょっとした暗示的なシーンの他は、物語が中盤を過ぎてからになる。しかも、チラシでの真木よう子の役の紹介は、「妻を装う女性」だから話はややこしい。

本作には、石神と多くの行動を共にする韓国人女性記者を演ずるキム・ヒョジンの他、中村ゆりと真木よう子という2人の美人女優が登場するが、ストーリー展開を追う中でこの2人の女優の役割をきちんと理解するのは、かなり難しいはずだ。

## <ジヌの研究テーマは？>

11月21日付日経新聞は「一般用医薬品（大衆薬）のネット販売ルールが固まったのを受け、ドラッグストア大手が本格販売に向け動き出した」ことを報じた。「最大手のマツモトキヨシホールディングスは年明けに都市部中心の翌日配達などサービスを強化。ウエルシアホールディングスは対面のように問答した上で適した薬を示すなど消費者の安心感を高める。ネット通販大手などの参入が相次ぐ中、店頭ノウハウをネットにも生かし対抗する」らしい。これは2013年1月に最高裁が下した薬ネット販売についての、「通販規制は無効」という判決を受けて、6月に政府が原則解禁を決定し、11月に大衆薬の99.8%をネット販売可能とする新ルール案を閣議決定した流れを受けたものだ。

記憶の混乱に悩む石神は、「もともと自分は交通事故で頭にケガした時以来、記憶力が悪くなった」と無理矢理自分を納得させようとしていたが、いくらなんでも妻の実家をまちがえたり、他人の家を自分の家とまちがえて入り込むようになれば、かなりヤバイ。記憶力の減退に悩むのは私も同じだが、それが人並みに年のせいなのか、それともアルツハイマーという病気のせいなのかの判断は難しい。多少ネタバレになるが、本作の展開を見ていると、どうも遺伝子研究の天才科学者だというジヌは、遺伝子ウイルスに記憶を保存し、その記憶を人に上書きするという研究に成功したらしい。この発見は、アルツハイマー治療への画期的な一歩となるはず、だった。

## <佐藤博士の野望は？>

他方、本作で再三テレビ画面上に登場するのが、伊武雅刀演じる杉沢製薬ゲノム研究所の佐藤博士。彼はアルツハイマーの権威らしい。したがって、ストーリー展開上、どこかでこの佐藤博士が大きな役割を果たすことが予想できるが、ジヌと佐藤博士が直接対峙（？）するのは、後半に入ってからアッと驚く展開、あるいはタネ明かしの展開になってからだ。

かつて、秦の始皇帝は不老不死の薬を求めて、徐福をはるか東の蓬莱の国まで派遣したが、佐藤博士の野望もそれと同じ。つまり、「自分の記憶を遺伝子ウイルスに保存し他人に次々と上書きしていけば、いつまでも生き延びることができる」ということの追求だが、さてその実現は・・・？

## <「上書き記憶」の消滅時効は？>

ジヌによる「記憶の上書き」という研究は画期的なものだが、実は2つの大きな欠陥があったらしい。その一つは、上書きされた記憶は1年で消えてしまうこと。もう一つは、副作用として元々持っていた記憶もなくなることだ。すると、ジヌの記憶の上に石神の記憶が上書きされたのではないかとすることに少しずつ気づき始めた石神が、近いうちに石神の記憶も、ジヌの記憶も消えてしまうのでは、と恐れおののいたのは当然だ。

「民事上の債務の消滅時効は10年、商事のそれは5年と決まっているが、民法には他に短期消滅時効」の制度があり、1年のものもある。この法制度としての消滅時効は、制度を変えればいくらでも伸ばしたり縮めたりできるが、ジヌの研究では、上書きされた記憶が1年で消えてしまうのはどうしようもなかったらしい。本作は「記憶の中へ」というテーマの映画だが、他方でサスペンス色をもち、『007』シリーズ並みのカーアクションを含むスリリングな展開を見せるが、それは石神の記憶の消滅時効が残り5日間と決まっているためだ。

映画冒頭にみる「廃墟人間」のような石神の姿を見ていると、どうもこの男はすべての記憶を失ってしまっているようだ。そうなってしまえば、石神は自分が誰なのかはもちろん、自分の妻が真木よう子演ずる美由紀だったことも、中村ゆり演ずるハン・ユリだったことも、すべて記憶から消されてしまっていることになる。ああ、嫌だ、嫌だ。そんな事態になるのなら、いっそ死んでしまった方がまし。誰でもそう考えるが、石神はそうなる前に何が何でもなぜ妻が死んだのかについての真相究明だけはしておかなければ、と考えたらしい。しかして、本作が描く天才科学者の5日間のスリリングな展開とは？そして、その結末は・・・？